実践レポート

言葉と現実とを結び付ける力を育て
学ぶ楽しさを体感する授業改善の試み
―国語科授業改善（文学教材）６つの視点―

三豊市立詫間小学校
教諭　　伊賀　ユミ

１　はじめに

本学級、第１学年の児童（27 名）は、国語科においては、特に物語文を教材とした学習に関して、徐々に活動に消極的になったり、授業を楽しめない様子が見られたりしてきた。その要因として、言葉から場面の様子を立体的に想像したり、人物の言動から心情を想像したりする力が十分育っていない児童が増加してきたことが考えられた。常に授業の中心として意欲的に活動している児童は、この力を身に付けている５、６名に限られてきたからである。他の児童は、「分からない」から「楽しい」と思えないのである。自らの授業の反省に立ち、今こそ初心に返り、低学年の国語科三種の神器と言われる「音読・動作化・吹き出し」といった活動を効果的に組み合わせて、ふんだんに取り入れる授業改善に取り組むことにした。

２　実践の内容・方法

（１）国語科の授業改善の内容

単元「ようすをおもいうかべながらよもう」-『おとうとねずみチロ』-の実践を例に紹介する。

① 付けたい力につながる学習問題づくり

学習問題と言えば「なぜ、どうして」という理由を問うものがほとんどであったと反省した。そこで、理由・因果関係を問う「なぜ・どうして」だけではなく、様子や状況、詳細を問う「どんな・どのように」や、核心や選択を問う「何が・どちらが」といった本時に付けたい力が育成できるような学習を展開するための学習問題設定に配慮した。問いが変われば、授業も変わることを再認識できた。

例　チロは、どうしてしんぱいになったのか。→う～ん。じぶんだけチョッキをもらえないかもしれないからかな。（児）→３びきの大よろこびはつづくのか。→大よろこびはつづかなかった。チロは、じぶんだけ、チョッキがもらえないかもしれないとおもって、しんぱいになった。（児）

会話文の音読をしながら、表情や口調等を想像することで、チロの不安や心配している気持ちがリアルに思い浮かぶ活動へと発展することをねらった。

例　チロは、なぜ、そとへとびだしていったのか。→難しいなあ…。（児）
→チロは、どんないいことをかんがえたのか。→山の上に行って、そこでね…。（児）

「……」に、チロの気持ちを思い浮かべて吹き出しを入れることで、チロの気持ちがより分かる活動へと発展することをねらった。

② 育成する見方・考え方（物語を読むコツ）の明示

「言葉による見方・考え方」を鍛えるためには「何に目を付けて、どう考えたらいいのか」という「見方・考え方」を身に付けなければならない。それを「物語を読むコツ」として児童に意識させ、授業の中で活用していった。１年生の物語教材の「かいがら」から「サラダでげんき」、「おとうとねずみチロ」の学習へと積み上げてきた「物語を読むコツ」をカードで掲示し、今まで学んできた考え方で問題解決ができるかという点を強く意識させるようにした。

【物語を読むコツ】

また、本校では「20 の思考スキル（考え方）とその思考を導く言葉」を整理し、授業実践に生かしている。

思考スキル	思考を導く言葉（例）	思考スキル	思考を導く言葉（例）
1　理由づける	わけは、理由は、根拠は、	１１　関連付ける	～と～はつながる、
2　順序立てる	まず、つぎに、そして、	１２　拡大する	広げると、～と言えば、
3　筋道立てる	結論は、わけは、つまり、	１３　焦点化する	大切なのは、一番は、
4　変化をとらえる	変化したのは、	１４　見通す	きっと～なると、多分、
5　構造化する	組み立ては、つまり、	１５　応用する	～が使えるかも、
6　具体化する	例えば、	１６　要約する	まとめると、中心は、
7　抽象化する	題をつけると、まとめると、	１７　評価する	～の良いところは、
8　推論する	もし、～だったら、	１８　多面的に見る	他の面・ことで、
9　変換する	言い換えると、	１９　比較する	比べると、
１０　関係付ける	～と～はつながる、関係は、	２０　分類する	仲間にすると、

【詫間小学校の「20 の思考スキル（考え方）とその思考を導く言葉」】

「おとうとねずみチロ」の学習では、どんな見方（「ちかくのことば」「にたことば」「まえのばめん」「ことばがあるときとないとき」「…があるときとないとき」）をどう考えるか（「くらべる」「つなぐ」「うごく」）の「物語のコツ」を働かせ、本文の叙述を基に様子や行動、気持ちを思い浮かべさせた。そうすることで、児童は、叙述を基にしながら、頭の中で立体的に様子を思い浮かべることができ、その結果として「嬉しい気持ちがよく分かる。」「声が響いている様子が思い浮かんだよ。」と言う児童が、徐々に増えてきた。

③ 人物の言動を具体的に想像するための支援（「思い浮かべようシート」）

書かれている言葉から、書かれていない言葉を想像させ、場面の様子をより鮮明に思い浮かべることは難しい。そこで、どんなことを想像すればよいかの観点を示すために、「思い浮かべようシート」（「吹き出し」の改良版）を活用した。

この「思い浮かべようシート」を活用し、登場人物が会話文をどんな様子で言っているのかを具体的に想像することで、登場人物の気持ちをより想像できた。児童は、思い浮かべたことを、声に出して音読に加えることで、場面の様子をさらに詳細に捉えることができた。

【「思い浮かべようシート」（「吹き出し」の改良版）】

④　課題解決中における協働的な交流活動の方法・手順の徹底

交流活動では、自分の意見を言って終わるのではなく、友達の考えは教科書の叙述を基に話しているか否か、自分の考えと同じか違うかを意識して意見交換をするようにさせた。班の交流活動では、話し合いの時間が限られているので、先に言った児童の意見について、自分はどう考えるのか、相手の考えに対してどう思うのかを話し合わせ、吟味させることで、何を話していいのかが明確になった。

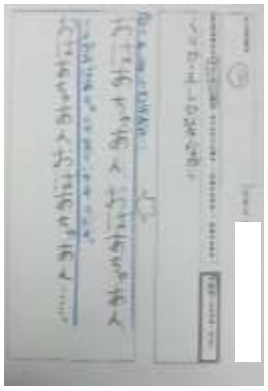
⑤　音読をしながら、現実の状況の再現について吟味する活動の充実

音読しながら想像したり、想像したことを音読で表現したりすることを大切にした。登場人物の行動を具体的に想像（何をしたのか、表情・口調・様子、行動の理由）する力を育成するために、音読するために文章を読むのではなく、音読することで具体的に想像するようにした。また、動作化も交えて音読をする等、「音読」、「吹き出し」、「動作化」を交えた活動を多く取り入れた。すると、より物語の世界に入り込み、楽しそうに学習している児童の様子が伺えた。

おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん…

（あれっ、なんだ。こえが　とんでった。やったー！やったぞー！）

（耳を澄ます動作　→　笑顔いっぱいで木の上で飛び跳ねる動作）



【心内語を想像して書いた児童のワークシート】

「……（こだま）」部分に心内語を想像して音読に重ねて表現したり、それに合わせて動作化したりすることで、言葉から現実の様子をリアルに再現する。

【木の上で飛び跳ねる動作をしている児童】

⑥　自分の成長や学び方の良さを実感する振り返りの充実

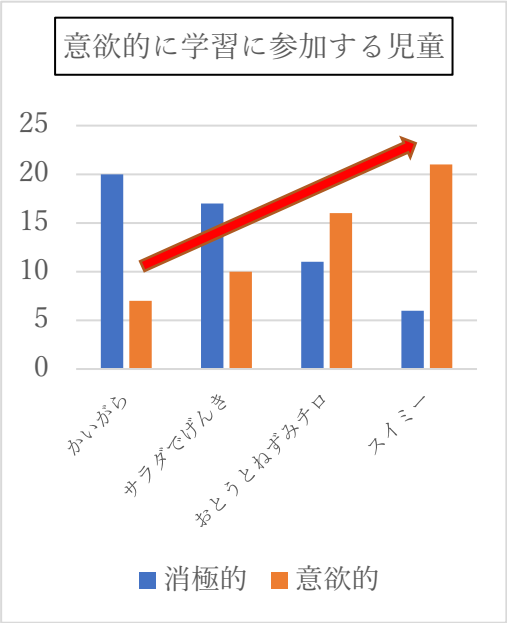
教材文の読みを生かして、人物の行動や気持ちを具体的に想像することの良さや楽しさを実感するために、各時間において振り返りの活動を充実させた。また、自己の成長を知り、学ぶ意欲を高めるために、単元を通して、学習問題の答えや答えとなる理由を叙述から見付けて自分でノートに書くことができたか、どんな言葉による見方・考え方ができたか等を振り返る場を設定した。

児童は、言葉による見方・考え方を使って叙述を基に想像したことを音読で表すことで、活動に対する楽しさ、深く広い読みができたことに対する満足感を味わうことができるようになってきた。

3　実践の成果

入学当初は、国語科の学習に、児童全員が前向きに取り組んでいた。しかし、徐々に授業で活躍する児童が限られてきた。それを実感した焦りから、自ら授業改善を６つのポイントから見直すこととしたのである。

結果的には、１単元を終えるごとに、意欲的に学習に参加する児童が２～３名ずつ増えてきたことが実感できた。そして、３学期末には 80%を超える児童が意欲的に授業に参加するようになった。



【意欲的に授業に参加する児童の変容】

（１）気持ちや様子を想像する楽しさ

文章を読む時に、ひとまとまりの語としての意味を捉えながら読むことができにくい児童が、叙述を基に考え、気持ちや様子を想像することが楽しくなり、意欲的に国語科の授業に取り組む姿が見られるようになった。

（２）深い読みへの喜びや充実感

１学期に表面的な読みで終わってしまった単元と比べ、読むコツを使っていくことで、深い読みができ、そのことに喜びや充実感を感じる児童が増えた。

（３）消極的な児童の減少

初めから分からないと諦めていたり、自信がなく発言が少なかったりした児童が、徐々に減少していった。

4　普及させたい取組と期待される効果

（１）国語科授業改善（文学教材）６つの視点

先輩の国語科教員から指導いただいて実践してみて、その効果を自分自身が深く実感できた「国語科授業改善（文学教材）６つの視点」を、低学年を担任する若年教員をはじめ、多くの教員に使っていただきたい。

（２）言葉と現実とを結び付ける力の育成

特に、小学校低学年においては、国語科三種の神器と言われる「音読・動作化・吹き出し」を効果的に、ふんだんに取り入れた授業を展開していただき、楽しい活動の中で、言葉から豊かに現実を描く力、つまり言葉と現実とを結び付ける力を高めていただきたい。

5　課題及び今後の取組の方向

（１）児童主体の学習問題の設定

第 1 学年ということもあり、児童から自然に出てくる疑問等から学習問題を設定していくのが難しいと感じている。「教師主導」の学習問題の設定から、徐々に児童主体の学習問題設定へ移行していく手順や方法を明確にしていきたい。

（２）教員が取り組むべき教材研究

45 分という限られた時間の中で、書く活動や話合いによる交流活動、音読（場合によっては動作化や劇化）を何度も繰り返すことが必要である。学習内容の精選や活動の焦点化等、教師が取り組むべき教材研究（付けたい力の研究・教材そのものの研究・児童の反応研究・単元配列研究）の効果的な方法も明らかにしていきたい。

引用：詫間小学校の「20 の思考スキル（考え方）とその思考を導く言葉」